

久留島武彦の朝鮮口演 その二

金, 成妍

九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年

<https://doi.org/10.15017/11037>

出版情報 : 九大日文. 11, pp.20-35, 2008-03-31. 九州大学日本語文学会
バージョン :
権利関係 :



久留島武彦の朝鮮口演 その二

金成妍 KIM SONG-YUN

一 はじめに

『京城日報』が「オトギバナシ」欄を設け、毎週童話を届けたい一九一七（大正六）年、童話を子どもに直接聞かせるために、日本から二人の語り部が朝鮮を訪ねてきた。前回の『大日文』一〇号で記したように、六月に大井冷光が、そして一月に久留島が朝鮮へ渡った。一月にあつた久留島の訪問については記録が少ない。少ない記録ではあるが『京城日報』と『毎日申報』から、その足跡を窺うことができる。まず、一月一八日『京城日報』の朝刊に、「朝鮮各地に於いて家庭講演会を催すため来京せる東京早蕨幼稚園園長久留島武彦氏は小幡朝鮮新聞主幹同伴挨拶のため十七日本社を訪問す。」という記事があり、引き続き同日の夕刊には、「文部省委託久留島武彦氏は十七日午前十時山●（判読不可の表示、以下同様―筆者注）政務総監を総督府に訪問し入京の挨拶を為せり。」という記事がある。これらの記事から把握できることは、久留島が文部省委託で「家庭講演会」を開催する目的を持って来朝したこと、そして、京城に到着した翌日は挨拶のために朝鮮総督府と京城日報社を訪れたことである。久留島は京城に一週間滞在した後平壤

に向かい、一二月二日再び京城に帰っている。

久留島を含め、巖谷小波と大井冷光の朝鮮訪問を機に口演を依頼し、口演童話を開いて評判を得た京城日报社は、一九一八（大正七）年五月五日に「お伽噺の会」を開催、龍山涙光（未詳）を講師に立てて、五月から一二月まで「京城日報巡回お伽講演会」を実施した。それによって始まった朝鮮における日本人の口演童話活動は、その後、三・一独立運動が勃発した一九一九（大正八）年から一九二〇（大正九）年まで途切れてしまう。日本人による口演童話活動が再開されたのは、一九二一（大正一〇）年五月にあつた岸辺福雄の口演からである。

同時期における朝鮮内部の動きを概観すると、三・一独立運動を契機に少年運動が活発になっていた。「元山韓国少年団」、「安辺少年会」、「倭館少年会」、「横城少年会」をはじめ、一九二一（大正一〇）年一月には「晋州少年団」が結成された。そして児童愛護思想を説く天道教の教えのもと、金起田や方定煥を中心とする「天道教少年会」が一九二一（大正一〇）年五月一日に創立された。「天道教少年会」は、創立一周年を迎えた一九二二（大正一一）年五月一日に「子どもの日」の記念行事を行った。それが朝鮮における最初の「子どもの日」となった。同年六月、方定煥による童話集『愛の贈り物』が開闢社から出版され、その翌年である一九二三（大正一二）年三月二〇日、朝鮮初の児童文学雑誌『オリニ』が方定煥の主筆で創刊された。韓国児童文学史において最初の本格的な児童雑誌として評価される『オリニ』の創刊は、近代児童文学の出発点とされる。

『オリニ』は、全国各地の少年会と連携を組み、少年会の機関誌としての役割も果たしていた。『オリニ』の読者欄は全て子ども達による投稿で飾られており、彼らの大半は少年会に所属していた。また彼らの中から多数の童話作家や童謡詩人が輩出されたことも看過できない事実である。『オリニ』を中心に行われた少年運動の具体的な活動をみると、数の多い順に雄弁大会、歌劇会、討論会、童話大会、講演会、音楽会、童謡童話会、学芸会、幻灯会、活動写真会などがあつた。

朝鮮児童文学の成立に関しては、『オリニ』の創刊をその出発点とする見方が定説となつている。だが、朝鮮では『オリニ』が創刊されるおよそ一〇年前から京城日報社による口演童話会が頻繁に催されており、日本からは小波や久留島などの児童文学者が招聘され、口演童話活動を行つていた事実がある。日本統治下に置かれた植民地という歴史的な背景をふまえると、朝鮮で行われた日本人の口演童話活動は極めて重要な意味を持っていたと考えられ、そうした口演童話活動の役割を検証しなければ、約一〇年後における朝鮮児童文学成立の全体像を把握することはできないと思われる。

そこで、一九二〇年以降に展開されていく朝鮮児童文学の成立を日本人の口演童話活動という新たな視点から捉え直し、『オリニ』創刊の背景を探るといふ主な目的を念頭におき、本稿では、前回に続き久留島の朝鮮口演活動を紹介していきたい。

二 久留島武彦の朝鮮口演（一九二〇年代前半）

京城日報社が後援・主催した岸辺福雄の「お伽講演会」が、一九二一（大正一〇）年五月一七日、京城黄金町の黄金館において午後二時から開催された。『京城日報』（一九二二年五月一九日付け）による口演会当日の様子をみると、「朝来より市内各小学校の生徒は先生に伴われさしにも広い会場は瞬く間に階上階下は少年少女に溢れて身動きもならず、聴者四千なほ館外の雨中に傘なかざして立ち去り兼ねた人々多数であつた。少年少女の間には熱い紅潮は浮かべられていた」という。開会前の約一五分間を利用して、京城日報社の大原社長が「潜水艇の話」を語つた。定刻二時になると、大原社長が再び壇上に現れて岸辺福雄を紹介し、開会の辞を述べた。岸辺福雄の口演は、記録されて『京城日報』に「岸辺先生のお噺」という題で一〇回にわたつて連載される。

岸辺福雄が口演した童話は、少年清とお爺さんと白という犬の話である。父は戦死し、母は病死した後孤児になつた清が優しいお爺さんに引き取られ、荷車を引く仕事を手伝いながら生活していた。ある日、道端で飢えによつて死にかけている白い犬を見かけ、白と名付けて家族にし、二人と一匹で仲良く荷車を引く仕事をした。しばらく経つてお爺さんが病氣にかかつて寝たきりになる。清はお爺さんの葉代のため、一等賞には多額の賞金がもらえる「少年美術展覧会」に絵を出品する。紆余曲折の後、清の絵が一等となり、お爺さんの病氣も治つてみんな

で幸せに過ぎたという話である。この話は、「フランダーズの犬」を思い出させる。「フランダーズの犬」の原作が一八七一（明治四）年に出版されたことを考えると、「フランダーズの犬」を改作した話である可能性も排除出来ない。

ところで、岸辺福雄が口演した童話の実録が連載されるなか、一九二一（大正一〇）年五月二十九日付けの『京城日報』に、久留島直筆の葉書が掲載される。同紙には、久留島の顔写真と共に、「日本中の子供さん達のオジイ様その久留島武彦先生が愈々六月の六日頃に京城へ来られる筈です。オジイ様は元来黄金館会社の在学児童の為に面白くてそうして有益なお話を聞かせて智慧を増さしてやらうといふ心から愈々内地を出発して遙々鮮満の地を巡回されているのです。併し久留島先生は朝鮮の少年少女をも愛していらつしやるやうに京城日報と云ふ新聞も大変お好きのやうで、京城にいらつしつたら是非京城日報を通じて京城のいいお子達と一日御話しをして見たいと兼ねた手紙や其の他でおつしやつて居るのです。そんな風であなの方と同じやうに京城日報社もオジイ様の入城期を、首を長くして待つています。又先生はあなた方と同じやうにあなた方のお母様やお姉さんにも是非有益なお話をしてあげたいと云つて居られます。それで本社では六月六日の夜をお母さん達の為に七日のお昼を皆さんの為にそれは面白いお話をして下さる事をお願いしましたところ、先生は次のような手紙を下さいました。」という京城日報社による言葉の後、以下のような久留島の手紙が掲載される。

（前略）却説迂申去る十一日より満鉄の招きにより沿線各方面目下巡回中の処暫く結末に近づき候まま一応大連に引揚げ都督府管下一二を取片付け六月四五日の交発足朝鮮を経て帰東の考えに有之就ては貴社にして差支なく六七日の頃京城にて昼間一回児童の為（尋五以上高女生徒まで）夜間一回婦人の為。講演致し候ても不苦候目下大分各名士従來の折柄斯る会合も随分重なり居る事と被存候へば御取捨は貴意に任せたく御意向の有無六月二三日頃迄に大連遼東ホテル宛御一報被下度候は好都合に候、今日の処にては六日午後までには京城着の考へに候へば六日夜と七日午前の時間ならば大体間違ひなかる可くと存じ居候右取敢えず平素御無沙汰ソビの御挨拶傍申●候 五月二十五日

満鉄の招聘を受けて満州巡回口演旅行に出かけた久留島は、六月六日の朝、京城に入った。その列車の中で、出迎えに行つた京城日報社の記者に対し、大連の奉天等の各地における婦人界の印象について語り、生活改善の第一歩として結髪と衣服の改良が必要であるという意見を述べた。「絶えず列車は動揺して周囲の風物は初夏の涼しい風の中に●気を見せているが、氏は話題を変へて、「主として今度は婦人界の方面が目的なので京城では御社の家庭講演会で多少の問題に触れて見たいと思ひます。何分にも各地の講演会で喉を痛めて居るので、児童講演会で果たして音量に不足を感じずに済みますかどうか……と話

しを進める時に南大門も程遠からぬ時が来たので氏は何処へと訊けば赤薪君の家へと云つていたが六日終列車で下仁するやも知れずと云つていた⁽¹⁾と云う。

翌七日、午後二時から黄金館で「こども大会」が、午後七時から公会堂で「家庭講演会」の開催が予定された。「こども大会」には、京城府内にある七校から四千名に近い小学生が集まつた。午後二時になると、京城日報社の藤村支配人が壇上に進み開会の辞を述べた。その後久留島が進み、まず、アメリカ少年が持つ日本人観のエピソードについて語つた。そして、「一本足の突貫」という伊太利戦話を口演した。欧州大戦乱で有名なイタリアの勇敢な物語である「一本足の突貫」は、エリンコ・トーテという勇士の生い立ちから始まる。エリンコは二一歳の時、機関車に左脚を切断される。一九一四（大正三）年九月、イタリアは長年にわたる仇敵なるオーストリアと戦争をした。一本足のエリンコは、「不具」な身を押しして亡父の遺志を継いで第一戦に立ち、怒みあるオーストリアに一矢報いたく兵を志願した。身不自由なため再三の志願も許されないエリンコは、遂に自転車を修練して、ある日国境イソソフ河畔チエルビニーヤ村に七日の旅をして三軍司令アオス殿下の陣に赴いた。ここまで話した久留島は、「此の時満場に起立を望み、簡單なる筋肉動作を行ひ三度の叫喚を繰り返して聴者の鬱を散ぜしめ」、再び口演に入った。

エリンコはチエルビニーヤ村の鈴懸けの並木でアオス殿下の伝令になり、間もなく殿下は彼の克己心を賞せられ突撃兵の一

人に編入された。宿志を達したエリンコは、泣かんばかりに狂喜した。ある真夜中、イタリア軍はイソソフの流れに沿つて歩いていきモンハルコーネの敵陣を襲撃しエリンコは軍の先頭に立つて躍進した。東の空の白みかかった時、モンハルコーネの高地で死山血河の大白兵戦が開かれた。エリンコは、壕に忍び入り、松葉杖を振つて敵兵の一人を倒し、右手の銃剣で今彼に手榴弾を投げた敵兵を突き刺し、血煙を上げて折り重なつて戦死した。翌日アオス殿下は戦場視察に来られた時、エリンコの死を見出して彼の戦死を賞し、長くイタリアの軍神に祭つたという。久留島によるエリンコの話は、一時間余にわたつて語られた。この「一本足の突貫」という童話の口演実録は、六月一日から一七日まで『京城日報』に連載された。

三時に「こども大会」を終えた久留島は公会堂に向かつた。予定より一時間遅れた午後八時から「家庭講演会」が開催された。先に引用したように、京城に入る列車の中で久留島は、「主として今度は婦人界の方面が目的なので京城では御社の家庭講演会で多少の問題に触れて見たいと思ひます。」と明かしていた。「家庭講演会」の会場となつた公会堂には、婦人連中を中心とした数百人の聴衆が入場した。八時定刻になると、京城日報社の編集局長である泥谷良次郎が久留島と共に登壇し、開会の辞を述べた後久留島を紹介した。

久留島は「自覚の発足点」と題する演題のもと、「一週間前に通過されました海城に於ける小学校校長の一身を巡る運命と然も人間の落付けぬ処としての其土地に住む人々の心情を最も

機微に触れて」話した。「家庭講演会」が散会したのは、泥谷編集局長が閉会の辞を宣した九時半頃であった。以下は『京城日報』による「家庭講演会」の様子である。

先生のお話しはもとと実在の生々しい見聞に基いていることとて聴衆の悉くが涙に袖を絞っていました。家庭に於ける現代の婦人に対する覚醒の言葉は、先生の真実な心の中から溢れて今日今の時に於いてあなたが自分自身これを斯うして見やう之れはいい事であると自覚した時にそれを直に実行し得るでせうか。又あなたはあなたの現在に何等の不満も無いでせうか？若しあるとすればあなたはどうする心算かと言々句々肺腑を突くものがあり、頭髮や、帯、衣服の問題等より今日の婦人の座り方に就いて日本婦人の座り方は世界中に其の比がない。只印度の或一部に上長の前に在る礼儀としてあるのみで日本婦人の座り方は決して時代に適応したものでない。この座り方は四百年前からの一連の悪習慣として伝統的になし来たられたもので、此の座り方は人が見れば必ず泥棒と見た時代の遺物であると喝破し、然もその座り方が婦人の人格を云為す基点となるに至つては甚だ時代錯誤と云はねばならぬと尚言葉を進めて眼を大局に注げよ。日本の現在には世界中で最も黄金時代に在るではないか。婦人が自覚して自我の発足点を切つて進み出るには最も都合のいい時であるとして、欧州に於ける戦後の惨状を物語つて適切な例を引用し、聴者の心を暗く

し最後に自己其者の内省を今少し深めよ。而して飽迄疑ひの中に生きよ。やがてその前に生の曙光は輝くと附言して講演を終られました。拍手はしばし鳴りを止めず。

久留島の口演の他にも、同年一〇月八日には南大門小学校で「お伽講演会」が開催され、「下関お伽倶楽部」で活動していた藤井日将、八島柳堂、そして吉田楚峰が口演を行った。また、一月一九日には沙里院小学校において京城日報社通信部主催の「お伽大会」が開催されるが、そこでは京城日報社平壤支局の矢橋小葩が口演を行った。それから同年一二月一四日、京城日報社内「京日コドモ会」が設立され、八島柳堂、矢橋小葩、吉田楚峰、吉原静光が中心メンバーとなつて口演活動を展開した。「京日コドモ会」による口演活動は一九三九（昭和一四）年まで続くが、創立メンバーによる口演活動は、創立直後である一九二二（大正一一）年に集中した。

「京日コドモ会」による口演会が頻繁に開催されていた一九二二（大正一一）年の五月、沖野岩三郎が朝鮮を訪れた。「基督教青年会」主催で開かれる「文芸講演会」に、講師として招聘されての訪問であった。この講演会は、京城日報社の後援によつて一九二二（大正一一）年五月二九日午後四時から南山町第二高女講堂で開催された。沖野岩三郎の演題は「家庭と文芸」であった。日本の童謡を紹介するなど、約三時間にわたつて講演を行い、午後七時二〇分に閉会した。

沖野岩三郎が朝鮮を訪れた一九二二（大正一一）年五月、朝鮮

には初めて「子どもの日」が唱えられたばかりであった。「天道教少年会」が創立一周年を記念して、同年五月一日を「子どもの日」に指定して記念行事を行なったのである。「天道教少年会」を中心とした少年運動が展開されていく一方、同年六月には、開闢社から方定煥による童話集『愛の贈り物』が出版された。また朝鮮内では、児童問題や児童運動が本格的に論じられ、児童運動の実践を目的とした講演会が数多く開催されていた。沖野岩三郎の講演が、「文学愛好家は勿論官吏銀行会社員宗教家教育家学生などあらゆる知識階級の人々」を相手に「始終満足を洪水させつつしかも多大の感銘と暗示を与えられたのも、「児童」に関する関心が高まり、本格的な児童事業が展開されていた、当時の朝鮮の風潮に相通じるところがあつたらだと考えられる。

沖野岩三郎の次に記すべき日本児童文学者の朝鮮口演活動には、小波の「全鮮巡回お伽講演会」(『九大日文』五号、七号参照)がある。一九二三(大正二二)年六月二四日から七月一四日までの二〇日間、小波は朝鮮半島の二〇カ所を巡回し、六〇回の「お伽講演会」を開催した。「全鮮巡回お伽講演会」を終えた小波は、一九二三(大正二二)年七月一四日、昌慶丸に身を乗せて日本に帰った。その三日後、小波とすれ違うようにして久留島が朝鮮を訪れた。久留島は一九二三(大正二二)年七月一七日から三日間、朝鮮の大邱で口演を行った。

小波の「全鮮巡回お伽講演会」は、京城日報社と毎日申報社の共同主催で企画され、朝鮮総督府所属の官公立機関の組織的、

また積極的な支援関係によつて、二〇日間という短期間でありながら六〇回の口演が企画され、六万人以上の聴衆が動員されたという、他に類を見ない特性をもつものであつた。講演会期間中の小波の活動は、『京城日報』と『毎日申報』を通して連日大きく取り上げられていた。それとは対照的に、一九二三(大正二二)年、大邱における久留島の口演会は、『京城日報』の「人事」欄に小さく一行報じられただけであつた。それは、久留島が民間次元での口演活動も展開していたことを物語っているのではないだろうか。

一方、一九二六(大正二五)年二月三日、『京城日報』には「朝鮮児童協会の猛運動」というタイトルで次のような記事が掲載される。

児童の健全な発育をこひねがひその父兄母姉に児童愛護の観念を普及するため組織された朝鮮児童協会は湯浅政務総監を名譽会長に李学務局長を会長に推薦し着々事業の拡張に努めつつあるが毎年五月五日の端午の節句と秋季皇靈祭には全鮮にわたつて児童愛護デーを催し社会的には児童愛護の宣伝講演会、ポスターの提出等をなし家庭的には愛護餅、神社参拝、記念植樹、貯金保険の加入等を行はしむる外務省は児童会館を建設し又児童の健康診察、乳幼児選奨、児童並に夫人相談、児童愛護展覧会、児童慰安会などを催し、極力児童の福利増進並に母性尊重観念の扶植に努める由で附帯事業として二十ページ大のパンフレット「朝鮮児

童協会の大綱」を発行し趣旨の徹底をはかっている。

そして、四月二日から四月二三日まで「第一回児童愛護講習会」が開かれる。会場は、京城日報社内にある来青閣であった。以下の引用は講習会を終えた後の『京城日報』の記事である。

本社来青閣において開催された朝鮮児童協会の第一回児童愛護講習会は既載の通り極めて研究的気分を肝溢せしめて盛会裡に閉会したが、同講習会員中には新しき時代に目覚めた鮮婦人も参加し連日熱心に聴講せる有様にて、期せずして同会は京城における最も堅実な婦人の団体化して最終日に計らずも同会員をもつて「母の会」設立の案が提出され会員相互の親睦は勿論従来の婦人会とは大いに赴きを異にし児童愛を基調とした母の力強い会合となすべく諸設の計画をたて会員三十五名をもつて二十七日午後一時より本町三越呉服店にてこれが発会打ち合わせと同時に発会式を挙行することとなつた。なお児童協会の「母の会」への入会者は会員の紹介なきものは絶対入会せしめざる由^④。

児童愛護を標榜し「朝鮮児童協会」を立ち上げた一九二六（大正一五年）、京城日報社は二つの大きな動きを見せる。一つは、積極的に童話を掲載し始めたことである。そしてもう一つは、「朝鮮児童協会」の主催で、久留島などの児童文学者を招聘し

口演会を開催したことである。『京城日報』による童話の掲載は、一九二八（昭和三年）二月末までほぼ毎日のように続いた。なお、『京城日報』に童話が掲載されている間、朝鮮には三名の日本児童文学者による口演会が開催された。先ず、一九二六（大正一五年）五月一二日午後七時、大田鉄道局友会講演部の招聘で日比性賢（未詳）のお伽講演会が開催された。

そして、六月一二日、「朝鮮児童協会」に招聘された久留島が京城駅に降り立った。久留島の訪問について『京城日報』は、「世界的説話術の大家であり全国数百万の子供達からおとぎのおどさまと仰がれている久留島武彦氏は十二日朝七時四十分京城駅着列車で入城した」^⑤と伝える。久留島が京城駅のプラットフォームに降りると、教育関係者や少年団、児童協会会員、母の会代表者など大勢の人々の出迎えが待っていた。久留島はその人々に取り囲まれながら、「京城駅も立派になつた。まごまごしていたら迷い子になりさうだ」などと、「ユーモアに富んだおとぎの王様らしい親しみを見せ」^⑥たという。なお、日露戦争従軍当時の戦友である赤薪の南山荘に入つてしばらくの間くつろいだ久留島は、「日露戦役兵站部に属して出征し約二ヶ年京城に駐屯し京仁間を往復された事がありその頃内地から軍隊の副食物として輸送して来るキリボシ乾燥のエピソードや稿料を酒にかへて赤薪氏と飲みたをした思い出話などそれからそれへと話題は尽きなかつたという。南山荘で朝食を終えた後、朝鮮児童協会主幹の佐田至弘や赤薪の案内で朝鮮神宮に参拝し、京城日報社を訪問した。

京城府教育会と京城日報社の後援によって「朝鮮児童協会」が主催した「久留島武彦氏大講演会」は、六月一二日の午後、公会堂で行われた。午後二時に「女学生への講演」を開会し、同日午後六時に「母の会」による歓迎会があり、午後七時には一般の人を相手とする「文化講演会」を開会した。「文化講演会」の翌日、『京城日報』には「子供の国のおぢさん、お話巡礼の久留島武彦氏」という見出しで、次のような記事が掲載された。

多少の期待と感激を以て迎へられた久留島武彦氏講演会は予定の通り十二日午後二時公会堂における女学生への講演会を以て初められた。定刻前世界的話術家たる氏にあこがれて詰掛けた第一第二高女生約一千名は会場を埋め今や遅しと氏の来場を待つ、やがて主催者児童協会主幹佐田至弘氏の開会の辞について拍手に迎へられてから涙と笑いの交響楽に聴衆を●はしむるものがあり午後三時閉会するも尚暫時は我に帰るを忘れるの感激をもたらすものがあつた。更に午後六時よりは児童協会「母の会」主催の歓迎会を京城堂会に催し赤木京城師範校長、平井学務課長、高橋視学官をはじめ教育関係者、公務者「母の会」会員その他の有志約百名出席、鎌倉保育園長曾田夫人の歓迎の辞について各自久留島氏を中心に打くつろいだ談笑を交し午後七時閉会した。

また、『京城日報』は「婦人連でギツシリ詰る盛んな文化講演」について次のように報じている。

久留島氏の文化講演は歓迎会に引き続き公会堂で開催午後七時半開会というに群衆は五時頃からひしひしと詰めかけ広い場内は忽ち知識欲にもゆる若い婦人達でぎつしり詰つてしまふ。定刻主催者のあいさつについて久留島氏は豊かな体躯を壇上に運び、「ものは見方で生きもし死にもする聞きやうで役にも立つし無駄にもなる」と前提して約二時間わたり巧妙なヂエスチユアと適切な事例をひいて親として娘として又妻としての道を説き聴衆に多大の感動と反省を促し盛況裡に閉会した。

「文化講演会」の翌日からは、久留島による童話口演会が開催された。六月一三日午前一〇時から、「名士の講演に多く恵まれなかつた普通学校男女児童のために」⁶⁾朝鮮児童協会主催で童話口演会が設けられた。会場は文化講演が開かれた公会堂となつた。『京城日報』によると、「全国数千万の児童達からおとぎのオジサマと仰がれる子供の国の王様久留島氏は北陸の舌栗毛にひきつづいての連日連夜の講演と乱調子のことこの頃の氣候に咽喉をおかされながらも新同胞の子供達のために四十分にあたり『二株の鬼あざみ』と題する芸術味のゆたかな面白い講演をなし洗練されたその身振りや巧妙なストーリーの運びに満界に釣りこまれ多数教育的効果をおさめて、十時四十

分閉会」⁷⁾した。口演を終えて控え室に戻ると、「少年団指導審議員の資格をもつて水原よりはるばる来聴せる少年団員」が久留島を待っていた。久留島は少年団員のために一場の訓話をなし、引き続き午後一時から千五百名の普通学校生徒に口演童話を行った。

翌一四日は三回の口演会が設けられた。午前中は、普通学校生徒のために口演を行った。午後一時からの口演会には、龍山・三阪を除く七小学校五年生以上の生徒千二百余名が集まった。

「巧なるゼスチュアと独特の話術」で、「文学土人が鯨ともぐらを助けて紀州郡智の大瀧の苦行の際、鯨ともぐらに助けられるという地理歴史に因深き童話」を約一時間にわたって語った。それから午後四時からは、京城府内初等教員や教育関係者に教育問題について講演を試みた。久留島は一四日の口演会を最後に、京城を離れ元山・咸興地方へ向けて出発する予定であった。ところが、「引張風のお伽王」(『京城日報』一九二六年六月一五日付け)となったため、口演会の要請に応じ、京城滞在を二日間延期することになった。

一五日は「桜井小学校母姉会」と三越主催店員及び取引関係者のための講演会が予定され、一六日は師範・演習科のための口演と東大門小学校保護者会の招聘による口演会が予定された。先ず、一五日前一〇時、桜井小学校の講堂で「お伽話大会」が開催された。二年以上の千百余名の生徒を聴衆にした久留島は、「叱言の多い少年が人攫い爺さんに攫われて幾多の危機を乗り越えて之れに復讐する」という話を聞かせた。一一時

に桜井小学校を出た久留島は、明治町の愛国婦人会幼稚園並びに京口貞子の経営する京城幼稚園を視察した。京城幼稚園は、一九一七(大正〇)年、大井冷光が満鮮旅行の際に寄ったことがあるところである。その時大井冷光は、「園長京口さだ子は、毎日午後には李太王殿下がいる徳寿宮に上がり、王子王女の教育にも務めていた。京城幼稚園には、朝鮮の貴族の子女五〇余名が教育を受けていた。」⁸⁾等と記していた。

午後、京城ホテルに入った久留島は、七時半から三越京城支店の店長よりなる丸越会会員並に取引関係者のための講演を行った。なお、一六日午前一〇時から京城師範学校講堂で師範学校生徒並びに演習科生徒のために、約一時間にわたり、「童話講演の要領について」と題した講演を行った。午後七時半からは、東大門小学校において同校児童母婦のために一般講演をなし、同夜一〇時に元山へ向け出発した。その後の久留島の足跡は、一九二六(大正二五)年六月一九日付けの『京城日報』から探すことが出来た。その記事によると、久留島は今回の朝鮮訪問を機して朝鮮児童協会の顧問となり、その上、久留島の講演が契機となって設置された「回字会」朝鮮支部の顧問にも任命されていた。

引き続き久留島の朝鮮口演の行跡を追っていくと、六月二〇日、朝鮮神宮境内で行われた朝鮮児童協会主催の「野辺の学園」に参列した後、六月二二日、釜山に辿り着いていた。久留島を迎え、釜山では朝鮮民報釜山支社主催の「お伽講演会」が開催された。六月二二日の昼、国際館で小学生を聴衆にした口演会

があり、午後七時から第一小学校で高女生を聴衆にした口演会が開かれた。そして翌二三日も昼と夜、二回の口演会が同じ場所で開催された。

久留島が朝鮮で口演を行っていたこの六月、満鉄の招聘を受けた小波が、満州沿線各地を深瀬薫などと一緒に童話巡講で回っていた。そして、小波と一緒に満州童話巡講に出かけた深瀬薫が、七月七日の夜、単身で京城に入った。深瀬薫は、親戚に当たる南米倉町の白石宅に滞在しながら、一日に二回の口演会を開催した。一日の午前は龍山金光教日曜学校で、午後は金光教南大門協会日曜学校で口演会が開かれた。口演会を終えた深瀬薫は、一二日に仁川を経由して日本に帰った。

三 久留島武彦の朝鮮口演（一九二〇年代後半）

一九二六（大正二五）年一月、京城放送局が設立され、翌年の二月一六日、朝鮮初のラジオ放送が開始された。また、京城日報主催によつて、同年五月には「コドモ慰安デー」が、七月一日から八月三十一日までは「朝鮮博覧会」が開催された。その間、『京城日報』紙上には児童文学と児童教育に関する記事及び論説が多数掲載されていた。前年に続き、ほぼ毎日のように童話が掲載されている上、「日本児童文庫」の広告が大きく一面を飾っており（一九二七年四月二九日、特集として北原白秋の「満天下の正義に訴ふ」が載せられている。また、「徹底的に児童を教養せよ」（医学博士三田谷啓、一九二七年六月二二日）「童謡

や舞踊は選択が必要である」（児童芸術協会中澤理事、一九二七年六月二二日）「職業教育、児童の将来を考えて」（文部省普通学務局長関屋龍吉、一九二七年六月二三日）「子供の為に音楽や踊」（一九二七年六月三日）などの論説が掲載された。

そして、「朝鮮博覧会」の真最中であつた一九二七（昭和二）年七月二八日午後三時五分、小池長が京城に着いた。初めての朝鮮訪問であつた。佐田至弘、京城日報社員並に多数の出迎えをうけ、直に京城ホテルに向かった。京城を訪れた小池長について、『京城日報』は、「小池長氏は人も知る現代日本における童話界の泰斗久留島武彦氏の最高門弟としてその話振りは氏を凌駕するといつても過言であるまい為に東京、大阪名古屋の各放送局は氏に依頼して幾度かマイククロホンの前で児童にまみえ内地では童話の兄さんとし多数児童達からうやまはれている」（一九二七年七月三〇日付け）と伝える。京城ホテルに旅装を解いた小池長は、「朝鮮は初めてです。釜山、大邱、木浦、大田と可愛い子供さん達の前でお話ししました。朝鮮の子供さん達はなんとなく親しみやすくてほんとに愉快です。明日京城の子供さん達にお話すると思へばもうたまらなく嬉しいです」（『京城日報』一九二七年七月三〇日付け）と語っている。

一九二七（昭和二）年七月三〇日、京城日報社の来青閣で「京日コドモ大会」が開催された。京城日報社は、「巧な動作と熱のこもつた話とあつて必ず喜ばれる事であらう。なほ当日は非常な混雑が予想されるので場内整理として金十銭を申し受ける事になつている」（『京城日報』一九二七年七月二九日付け）ことを告

知していた。なお、「去る五月の本社主催コードモ慰安デーで大喜びであった京城一万余の小学生諸君は定めし当日の大会を待遠く期待されるであらうが更に当日は朝鮮における子供達の同じ系統である佐田至弘氏が小池長氏のため援助口演を快諾されたので日頃馴染のふかい京城の小学生諸君はこの催しに一層親しみを加へられるであらう」とも報じた。

筆者は今回の調査を通して、小池長が一九二七（昭和二年）と一九二九（昭和四年）年に朝鮮を訪れた事実を明らかにすることが出来た。しかし、小池長自らによる「朝鮮の普通学校で五十回程お話をした」という記述や、佐田至弘の「全満と朝鮮全島にまであまねく足跡をとどめ」という記述は、小池長がもっと朝鮮を訪れていた可能性を示唆する。それに加えてもう一つ注目しておきたいことは、小池長が朝鮮を訪れた際に、JODKK京城放送局から口演を試みていたことである。同時期日本では、大正の末期から昭和の初期にかけて、ラジオが普及するに伴い、ラジオで最もよく出演した人と新聞社関係の人たちで放送を目的とした「アンテナクラブ」というグループを結成していた。NHKの亀山半眠と三新聞社、名古屋新聞の鈴木夢平、新愛知新聞の松永亮逸、名古屋毎日新聞の平井潮湖、そして巖谷小波門下の森川紫氣（市立名古屋図書館）とともに、小学校訓導であった小池長は、そのメンバーとなり、しばらくの間名古屋の童話界における代表的な存在となった。朝鮮における活動は、その延長線上におかれていたとも言えるのである。

ちなみに、JODKK京城放送局による連作童話は一九二七（昭

和二年九月二〇日からスタートしているが、その第一回目に登場した人は「朝鮮児童協会」及び「童心社」の主幹を務めていた佐田至弘であった。連作童話に選ばれたのは、懸賞募集で当選した本町二ノ八七玉喜屋の児玉武次郎による「赤いお城」という童話であった。なお、佐田至弘は同年一月二三日、「最近に於ける童話界の傾向」という論説を『京城日報』に寄稿した。そこには、「今年などは内地から、よいお話の小父さんが幾人も訪ねて来られました。なかでも名古屋の小池長、埼玉の長沼依山、大阪の高尾亮雄、高知の深瀬薫の諸氏は日本童話界でもその人ありと知られてゐる」と記されており、その記述から、小池長や深瀬薫に加えて「埼玉の長沼依山、大阪の高尾亮雄」も朝鮮を訪れていたことが判明した。

また、佐田至弘は同論説において、「童話実演においては今なほ回字会の勢力が一頭地を抜いておる」と述べている。そのような発言は、東京の童話界のみならず、朝鮮における日本人による口演童話界にも当てはまるものであった。久留島を中心とした「回字会」メンバーによる朝鮮口演は、後を追うようにして毎年絶えず催されていたのである。

その様子を概観すると、「京日コードモ会」や「朝鮮児童協会」に加え、「京城児童連盟」という児童関連組織を構築するようになった京城日報社は、一九二七（昭和二年）の年末、「全京城コードモ忘年童話大会」を企画するに至る。日本からは、久留島の招聘が決定された。

京城日報社に招聘された久留島は、一九二七（昭和二年）一

二月一八日の朝、安東に到着した。午前一〇時から第一小学校で「子供のしつけ方」について講演を行った。同夜、夜行列車に乗って京城に向かい、翌一九日の午前九時五〇分、京城駅に到着した。京城駅に降りた久留島は、鈴木丁字屋支配人、加藤三越支店長、同婦人、佐田至弘などの出迎えをうけた。そして、「母の会」主催の歓迎会が、午後二時から京城ホテルで開かれた。歓迎会で講演を行った久留島は、鉄道養成所に移動し、午後五時から一場の口演を行った。それから、六時半から公会堂で開催された「全京城コードモ忘年童話大会」に臨んだ。

「全京城コードモ忘年童話大会」における童話の部には、久留島をはじめ、大石運平、佐田至弘などが出演した。そして音楽の部では、開会と同時に「全京城コードモの歌」のコーラスがあり、ハーモニカ、マンドリン合奏等も演奏され、出演者は童話音楽で二〇余名にのぼった。大会について『京城日報』は、「今回の大会はコードモと成人の両者に歓迎されているので家族的な参加者が多い」（『京城日報』一九二七年二月二〇日付け）と報じた。久留島を招いての「全京城コードモ忘年童話大会」があつた翌年、京城日报社は再び「子供会」を企画し、一九二八（昭和三年）四月一日午後一時から、京日児童連盟と江藤旭菫会の後援による「京日コードモ会」を来青閣で開催した。特にこの「京日コードモ会」では、ハーモニカの天才少年、足達光男の演奏が注目された。そして、同月二〇日、『京城日報』に「子供に童話を聞かす時の注意」という論説が掲載される。「国民性の相違に注意」という副題が付いたこの論説は、久留島によるものであ

つた。

そもそも童話は人間の欲望に基づく所を、或いは理想に到達する手段を示す筋路であつて、人類の発展向上を意味する所から喜ばれて語り伝え、いい伝えられるものではあるが、その時代や環境によつて子供の教育上よく考慮しなければならぬのである。即ち童話には人の欲求と同時にその国の国民性や民俗が背景をなしているから、その骨組とそれに色をつけている点に気をつけないと意外な結果を見る事がある。例えば、ロシアの童話に出て来る百姓は無智蒙昧で非常に正直であるが、南欧のそれと比較して全く違っている。それを知らずに日本の百姓に当てはめて取り扱ふと話の味が出ないのみならず、話の骨組を壊してしまう事が多い。印度の童話でも暑い国だから水に關した話が多い。そして一面には継母や継子の話も随分沢山ある。又人間の発育が心理的にも真理的にも大へんな相違を見せている。殊に男女間の性的目醒が非常に早い。ほかの国ではまだ少年であるべき年頃に、早くも子供を生む。それがため精神的にも欠陥が多い。母らしい母になれず子供を接する者や自分を殺す者が多いから継母継子の話が多い。かやうな国の話を日本のやうな温帯地方の発達した国の社会生活としておとぎ話を聞かせると大へん矛盾した結果を来たし恐るべき事を暗示しやすい。それで余程考慮しなければならぬのである。これはドイツの話或いはロシアの話ですとい

ふ風にまづ教えて、さて日本ではこんな事はありませんが
と注意してやる事が賢明な方法である。かうすれば未然に
その弊害をふせげると思ふ。

『京城日報』を通して「子供に童話を聞かす時の注意」点につ
いて語った久留島は、その一五日後、再び朝鮮を訪れた。今
回は一人ではなく、安倍季雄と一緒にであった。一九二八（昭和
三）年五月五日午前八時五〇分、久留島と安倍季雄を乗せた列
車が京城駅に到着した。五月五日に予定された「謝恩会」と、
七日に予定された「婦人講演会」に臨むための訪問であった。

「謝恩会」は、佐田至弘の主幹・主事とする「朝鮮児童協会」
と「母の会」によって公会堂で予定されており、「婦人講演会」
は京城日报社の来青閣で舉行される予定であった。久留島を「我
国童話界の王様久留島武彦」と紹介する『京城日報』は、「氏は
来鮮の数多き同氏は朝鮮の児童には非常に親しみ深く従つて
氏の訪れは府内の児童達を喜ばす事であらう。行き詰まつた童
話を更に研究し一進路をきりひらいた同氏はただに童話家のみ
でなく婦人問題に対してもよき指導者であるが貞淑な婦人が漸
く忘れかけられモダン趣味の演行する今日、氏の説く所は必ず
や半島の婦人界に深い衝動を与えるであらう」⁽⁹⁾と伝える。

五月六日付けの『京城日報』に掲載されたJODK京城放送
局のプログラムには、久留島と安倍季雄の名前が載っている。
それは「児童愛護デー、プログラム」であるが、その構成には、
「子供を愛せよ」と題した久留島の講演と、「世界一の知恵者」

という安倍季雄の口演童話が含まれていた。

朝鮮児童協会の主唱によって春秋に二回行われていた「児童
愛護デー」は、すでに年中行事の一つとなっていた。「児童愛
護デー」当日の午後二時、久留島と安倍季雄は「謝恩会」に出
席し、六日は午前、午後の二回にわたって第一六回の「全京城
コドモ大会」に参加した。七、八、九日の三日間は、市内各小
学校へ巡回公演を行った。『京城日報』の記事から各会の様子
を概観することができる。まず、「謝恩会」に関する記事であ
る。

朝鮮児童協会、母の会主事佐田至弘氏が童心賛仰十周年を
記念するため同氏年来の主張にかかる全鮮児童愛護デー当
日午後二時より京城公会堂において盛大に開催出席者は官
民の主なる関係者同夫人百余名にて定刻佐田至弘氏の開会
の挨拶と共に併せて過去十ヶ年間の主なる児童奉仕の経過
報告があり開宴次いで、高橋学務長代理馬野、京城府尹の
謝辞があり、同時に久留島、安倍両氏の講話があつてその
間杵屋佐多枝社中の長唄童謡をはじめ愛●幼稚園児の遊
戯、母の会会員家族令嬢の舞踊等、まことになごやかな空
気がみなぎるとともに各名士の佐田氏に対することは来
会者一同を幾度か感激せしめて同五時歓談裡に閉会した。⁽¹⁰⁾

次に、「婦人講演会」の様子を伝える記事である。

目下入城中の少年文学の大家、久留島武彦および安倍季雄両氏の婦人講演会は七日午後七時から我社並に母の会の主催で来青閣に開催されたが、この日聴衆は多くの女性の外数多男性も交へて開会前より堂にあふれていた。定刻となるやまず佐田至弘氏は「朝鮮の婦人運動について」と題し朝鮮特異の婦人運動を具さに解剖してその帰向を示し、次いで安倍氏は「童話とその見本」と題しすつきりしたユーモアに満堂を魅せ、最後に久留島氏は盛んな拍手を迎えられて登壇、「女の髪の毛と運命」の題下に神秘を含む女の毛髪と人の運命を比べて面白く論じて近来にない感動を与えた。午後九時盛況裡に散会⁹¹。

久留島が「婦人講演会」で語った「女の髪の毛と運命」という話は、講演一カ月後の六月五日、雑誌『朝鮮及満州』(二三七号)に収録される。「女の髪の毛と運命」は以下のような内容である。

女の髪の毛と運命は心理学上科学的に見て面白いかどうか、分らないが、一般的の運命と髪の毛とは面白い関係がある。多分朝鮮でも同じだろうが、女の子が小学校を卒業して女学校に行く頃になつて、自分の身体上に就き所置することは何であるかと云ふに、誰かれも注意を受けずに必ず女学生と云はれる様になると、髪の毛を切ると云ふことである。昔から髪の毛は間髪を入れずとか云つて、小さい

ものに譬へられたが、其の小さいものが大なるものをつなぐ女の髪の毛は大象をも繋ぐと云はれて居り、女の髪の毛は色々の意味で重要な性質を帯びて居る。(中略)此頃断髪の種類で、ラ・ガルソンなる断髪が流行してゐるが、之れは如何なる所より始つたかと云ふに、仏国の有名な女流小説家であるマーガレット女史が書いた、ラ・ガルソンなる小説に起因するものである。其の筋は、或一人の女が純真無垢な愛を捧げてゐた男が、無情にもその愛を蹂躪つてしまつた。彼女は丁度男の様な格好に髪の毛を切つてしまつた。そして世の男と云ふ男を咀ふと云ふのであるが、此の小説を通して見ても如何に仏国の社会状態がデカダンであるかが判る。此の小説が世に出てからラ・ガルソンと云ふ断髪が流行したのである。それだから、此の断髪には、男を咀ふと云ふ心の動きが現はれてゐる。結論をつける程の研究は重ねてゐないが、髪の毛と運命とは実に面白い関係があると思ふ。

一九二八(昭和三年)五月五日、第一六回の「全京城コドモ大会」に招聘された久留島と安倍季雄は、九日まで京城市内の小学校を巡回口演した後、日本に歸つた。そしてそのわずか一カ月後、久留島が再び朝鮮に足を運んだ。六月一八日午後一時、大田の小学校講堂で口演を行い、午後八時、同堂で児童及び婦人問題について講演を行った。

同年七月二〇日の『京城日報』によると、「内地の仙台、福

島県、日光、久喜、(中略)各主要都市の団体と朝鮮児童協会の連携が実現し、その界の権威者が相次いで渡鮮することとなり、鮮内の視察を兼ねて新しい研究材料をも相互に交換しながらこの方面から内鮮児童の精神生活にすくなからぬ幸福と融和の実現を示しておる」ことが報じられており、なお、同紙には八月に檉葉勇が朝鮮を訪れることが記されている。『京城日報』は檉葉勇について、「児童協会の招聘により大塚講話会の発行童話実演全集の筆者にして東京舞岸小学校にあつて献身的に貧兒教育に携つておる有名な檉葉勇氏は関西地方における児童家としての第一人者である」と紹介している。また、同記事には、檉葉勇の他「石澤含笑氏、文部省内少年団日本連盟本部主事細野活三氏等が相次いで入城することとも報じられた。しかしながら、檉葉勇や石澤含笑、細野活三が朝鮮を訪問した際の記事は見当たらなかつたため、詳細な訪問内容を把握することは出来なかつた。

「朝鮮児童協会」と日本児童団体との連携によつて、日本から「その界の権威者が相次いで渡鮮」した一九二八(昭和三)年は、大阪市北区市民館内北大阪少年団プラスバンド一行二〇名が軽快なボーイスカウトのユニホームに各々得意の楽器を携帯して朝鮮を訪れたことを最後に、日本児童文学者の訪問で賑やかだつた一年の終わりを告げた。そして、その翌年の一九二九(昭和四)年は、久留島と小池長の訪問があつた。一足先に久留島が大田で童話を語り、その一カ月後、小池長が釜山で童話を語つた。

久留島は、一九二九(昭和四)年九月七日、大田に到着し、午後一二時半から小学校講堂で小学校四年以上及び女学校生徒に口演を行つた。午後二時からは中学校講堂で中学校全生徒に口演を行い、引き続き午後八時から小学校講堂で婦人や女学校上級生及び一般人を聴衆に口演を行つた。その次の日に大田を発ち、清州を経由して大邱へ向かつた。この一九二九(昭和四)年における口演が、久留島にとつて最後の朝鮮口演となつた。一ヶ月後の一〇月には、久留島の後を追うように小池長が朝鮮で口演を行つた。また、一九三〇年(昭和五)に入つてからは、還暦を迎えた小波が四回にわたつて朝鮮に渡り、精力的に口演童話活動を行つた。

以上のような日本児童文学者による口演童話活動が展開される一方、朝鮮には、朝鮮児童文学者による口演童話活動も展開されていた。代表的な口演童話家としては方定煥があげられる。方定煥は、『別乾坤』(第五卷第九号、開闢社、一九三〇年一〇月一日)に掲載した「演壇珍話」のなかで、「僕は十年前初めて京城で童話口演というのを試みた」と記している。すなわち、方定煥が初めて童話の口演を試みたのは、「天道教青年会」から「少年部」が分離され、さらに「天道教少年会」と改称され本格的な児童文芸運動が始められた時期であつた。それは、岸辺福雄によつて朝鮮における日本人の口演童話活動が再開された時期でもある。方定煥が初めて朝鮮で童話の口演を試みた時は、日本児童文学者が朝鮮で口演を始めてからすでに一〇年が経過していたのである。朝鮮で行われた日本人の口演童話活動の役割

と、朝鮮児童文学者による口演童話活動の関係については稿を改めて述べていくことにする。

【注記】

- 1 『京城日報』一九二二年六月七日
- 2 『京城日報』一九二二年六月八日
- 3 『京城日報』一九二六年四月二七日
- 4 『京城日報』一九二六年六月一三日
- 5 『京城日報』一九二六年六月一三日
- 6 『京城日報』一九二六年六月一四日
- 7 『京城日報』一九二六年六月一四日
- 8 大井冷光『お伽の旅 哈爾濱まで』（玄文社、一九一九年六月）参照
- 9 『京城日報』一九二八年五月三日
- 10 『京城日報』一九二八年五月七日
- 11 『京城日報』一九二八年五月八日

（九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年）